



株式会社本間組
東北支店長

菅原 純一 さん

すがわら・じゅんいち

1983年秋田工業高等専門学校土木学科卒、本間組入社。新潟県内と東北支店管内で主に海洋土木工事や都市土木工事に従事。2011年の東日本大震災では直後に宮古港（岩手県）の啓開作業を担当し、翌2012年から5年間、東北支店の工事部長、土木部長として震災復旧・復興に携わる。土木事業本部土木企画部長、名古屋支店長などを経て、2023年1月から現職。秋田県出身。61歳。

あの頃、 思い出の現場

酒田北港航路泊地浚渫工事

新人時代に学んだ

海上工事の 大切な基本

公務員だった父がインフラ整備に携わる技術者、叔父が1級建築士でしたので、もの造りを身近に感じられる環境で育ちました。1983年に本間組に入社し、1カ月ほどの研修を受けた後、山形県酒

田市の現場に赴任します。当時、NHK連続テレビ小説「おしん」が放映されており、酒田は話題の地域でした。

最初に担当した現場は、酒田港で4,000PS(馬力)のポンプ浚渫船を使った航路浚渫工事です(運輸省第一港湾建設局発注「酒田北港航路泊地(-13m)浚渫工事」)。新人である私の一日の仕事は、朝に浚渫船の位置を六分儀で測量することから始まりました。続いて平面図に三稜(かん)分度儀で位置を決定し、前日からの掘進長を割り出して浚渫土量を計算します。合わせて運転時間や転錨などの休止時間、燃料の消費量などを記載し、ポンプ浚渫船の運転日報を作成します。浚渫区域や誘

導点などの基準点測量は、今のように座標を入力すれば簡単にCADで角度と距離を出せるわけではなく、三角関数を使用した手計算で行っていました。

日課の一つに天気図の作成がありました。インターネットがまだ普及していない時代ですから、ラジオの気象通報を聞いて作成していました。この記録を間違えると工程や安全管理に多大な影響を及ぼしますので、ラジオからの音声をカセットテープに録音しながら正確に作成したものです。



酒田港の航路浚渫工事(1990年代に撮影)。後方に鳥海山が見える

上司や先輩からは大切な基本を教えてくださいました。現場長からは、「例えば10億円の工事を実質100日で浚渫する場合、1日作業を止めたら1000万円の出来高が損失する。気象海象をしっかり予測できることが、工事の安全確保だけでなく出来高の損失を防ぐのに大変重要で、海上工事を行う上での必要最低条件である」こと、工事主任からは、「チェックをする習慣」「作業内容、使用機械や人工数、出来高などの歩掛かりの日々の記録」「工期内に安全で良いものを造り上げ、利益を得る」ことを学び、先輩たちから施工管理の肝となる基本を厳しく指導していただきました。この現場で体得できた経験はその後の成長の土台となったといっても過言ではありません。この教えは今も大切な礎として若手に継承しています。

着任から1カ月後の1983年5月26日、マグニチュード7.7の日本海中部地震が発生します。私はその日、音響測深機で深淺測量をしていました。ちょうどお昼頃だったので、岸壁で測量船の帰りを待っていた時でした。強い揺れで船溜りに停泊していた起重機船のフックが大きく揺れてとっさに岸壁から離れましたが、太平洋側と比べ日本海側では大津波が発生するという認識などなく、揺れが収まると岸壁に戻っていました。幸いにも酒田港は40cm程度の津波で済んだものの、能代港

では津波による死者35名、秋田港でも液状化で大きな被害を受けました。津波、液状化の恐ろしさを初めて肌で知る経験となりました。

当時の通信手段は携帯電話がなく、固定電話が業務用無線でした。地震直後は秋田港の現場と連絡が取れず、酒田から車で2時間走って現地を確認し本社へ状況を報告しました。この地震で海上工事における津波への防災対策の重要性を強く認識し、これ以降、施工計画書に地震時の対応に加えて津波警報発令時の対応を記載することとなりました。

入社4、5年目には新潟県内で新潟西港山の下岸壁(-7.5m)改修工事(発注・新潟県)と新日本海フェリー埠頭設備工事(同・新日本海フェリー)に携わります。初めて型枠・支保工の計算やコンクリートの打設管理を行うなど、ここでも技術者として貴重な経験を積むことができました。



入社5年目の頃(前列右端)

入社して40年。これまでに様々な現場で責任ある仕事を任せられ、数多くの困難や自然との闘いもありました。しかし幾つもの困難を乗り越え、やり遂げた達成感は格別です。人々の暮らしを支える街づくりとインフラ整備、災害時の復旧・復興など社会的使命を担い貢献できるという「誇り」、そして「やりがい」を大きく感じています。

通信システム界では、あと数年もすると「6G」の時代を迎えます。情報処理能力の向上とAI(人工知能)の活用により多方面で自動化が進み、働き方も含めて建設産業は大きく変革していくと思います。これからの技術者には変化に柔軟に対応できる能力が求められます。変革期にある今だからこそ、自らの意思で自分たちが働きやすい環境づくりを推し進められる可能性を秘めています。若い人たちには失敗を恐れずいろいろなことにチャレンジしてほしいと思います。